

○ マンガリツツアとTOKYO Xが対談、血統保護、付加価値向上が重要と認識

ハンガリー固有種「マンガリツツア」豚のブリーダー協会である全国マンガリツツア飼育業者連盟(MOE)のトート・ペーテル会長ら一行がこのほど来日し、3日、東京・港区の駐日ハンガリー大使館内でTOKYO X-Associationの植村光一郎会長との対談会が開かれた。トート会長らは、日本市場での「マンガリツツア」販売5周年記念とFOOD EX開催を機に来日した。討論では、ハンガリーと東京を代表する両ブランド豚の生産振興について、生産基盤拡大のための方策やマーケティング、血統・ブランド保護の取組みなどについて意見を交わした。トート会長(=写真右から2人目)によると、一時期絶滅の危機あったマンガリツツアの頭数が回復し「食べられる国宝」とまで認知されるなど復活したことについて、残された貴重な遺伝資源を業界挙げて厳格に管理・保護してきたことや、一般豚の3倍近い価格で販売されるなど一般豚との差別化や付加価値を高めるマーケティングを追求してきたことが復活した要因であると説明した。

マンガリツツアは世界で唯一体が毛に覆われ、脂肪の割合が非常に高いハンガリー固有種で、第2次世界大戦までは数百万頭の規模で飼育され、サラミやラードなどの原料に使われていた。ところが、その後70年代には絶滅に近い状態に陥り、共産主義時代には遺伝子バンクも閉鎖され、91年にはたった198頭しか存在しなくなっていた。この事態に危機感を抱いた関係者らによってかつて存在したMOEが再組織。「ブロンド」「スワローベリー」「レッド」各種(ブラックは絶滅)の遺伝子保護と血統証明書の発行、マイクロチップ・耳タグによる管理・証明などを行うことで飼養農家も増加し、13年は繁殖用メス7,327頭、同オス300頭の血統が証明され、年間5万頭以上の出荷に上っているという。また飼養農家が79年には4戸にまで落ち込んだが、12年には160戸まで増えているという。

○ プリマハムが4月1日付人事異動

プリマハムは4月1日付で次の人事異動を行う。▽執行役員生産本部本部長代理ハム・ソー担当、兼茨城工場長(執行役員生産本部本部長代理ハム・ソー担当、兼茨城工場長兼製造部長)佐々木久志▽茨城工場製造部長(三重工場製造部製造一課長)鉢呂淳士。



トート会長は、マンガリツツアの飼養農家が増えたことについて、「基本的にマ

ンガリツツアは一般豚よりも飼育期間が長い(12~14カ月齢・140kgで出荷)、非常に手間がかかるなど一般の白豚に比べて経済的に向かず、利益を追求する大規模農家よりも、むしろマンガリツツアそのものを好んでいる小規模農家が多く、そうした農家にマンガリツツアを飼ってもらおうよう、協会からアプローチしてきた」。その一方で、「マンガリツツアは一般豚に比べて繁殖率や歩留まりも悪い(肉3:脂肪7)、市場では枝肉で一般豚の1.5倍、精肉段階で3倍以上の価格帯で取引されることで何とか採算が合う状況にある。その価格帯で販売できることで初めて品質の高さや飼育の特徴など消費者へのブランディングの費用もねん出できるようになる。マンガリツツアが絶滅危惧種にあった要因のひとつに脂の多さがあるが、残り7割の脂肪にもいかに付加価値を高めてゆくかが今後の課題だ」と述べた。さらに04年にハンガリー国会で国宝に認定されたことについて、「単に美味しいだけでなく、面倒な作業ではあったが、血統の登録を綿密に行い、厳格に管理してきたことが大きい」と、ブランド振興のためには品質面だけでなく、血統など遺伝資源の厳格な管理も重要な要素であることを強調した。また植村会長からは飼料米を含め全ての飼養農家で飼料を統一し、生産マニュアルに基づいて生産されたものしか「TOKYO X」として認められないことを紹介し、トート会長らも関心深く聞いていた。